

論文

幼稚園年長児サマースクールの企画と実践(2)
—振り返りレポートの分析から—野崎真琴
野田さとみ

1. はじめに

保育者養成課程においては、各科目の学びを実践力へと結び付ける科目として、幼稚園教諭免許では「教職実践演習」、保育士資格では「保育実践演習」が設置されている。ここでは保育に関わる知識・技術を単独のものではなく、保育者養成課程における学修を科目横断的に実際の保育実践と結び付けることが課題となる。

本研究では、「教職実践演習」の実践課題の一つとして実施した「年長児サマースクール」の企画・実践について検討した。この課題は、保育内容や発達などを中心としたそれまでの学びを基盤として、目的を達成するための討議、複数の保育者が連携をとって保育を行う行事の企画・実践を体験することを通して、組織の一員として行動する役割や責務、問題に臨機応変に対応する判断力等を養うことを目標としている。4月から7月末までの約4か月間の活動を通して得られた学生の学びと課題について、振り返りレポートの記述をテキストマイニングの手法を用い分析、検討することとした。

2. 方法

2.1. 対象及び実施期間

対象は、2018年度2年次開講科目「教職実践演習」受講生のうち「年長児サマースクール」の企画・実践の課題に取り組んだ17名であった。またサマースクールに参加した園児は、附属T幼稚園年長児2クラス49名であった。

2.2 年長児サマースクールの概要

「年長児サマースクール」は、附属T幼稚園年長児が短期大学へ来校し保育科学生と交流をする行事として、毎年7月に実施している。この行事は、T幼稚園における夏休み行事の一つとして、年長児のみを対象とし、以下の3項目を主なねらいとして設定している。

幼稚園年長児サマースクールの企画と実践（2）

(1)公共交通機関を利用し地域の様子に関心を持つ。

(2)友だちと助け合いながら行動し絆を深める。

(3)名古屋柳城短期大学の学生との交流を楽しむ。

(1)については、T 幼稚園は附属幼稚園ではあるが短期大学から 30km離れた場所に位置しているため、年長児の課題として電車とバスを乗り継ぐ移動をあえて体験することを課題としている。子どもたちは短大の場所や行き方、交通費などについて家族に相談するなどして調べたり話し合ったりしながら、自分たちで計画を立てるところから始める。(2)については、この行事の取り組みにおいてはクラス単位でなく、8人程度の小グループが編成され、各グループに担当教諭がつき、幼稚園と短大間の移動、短大での活動はこのグループを基本として行動する。小グループの仲間での活動を通して協力し合う経験ができるよう計画されている。(3)については、短期大学の学生による企画プログラムに参加することで、普段関わることのない大学生との交流を楽しむことを目的としている。

学生はこれら幼稚園における活動のねらいを理解しそれを踏まえ、教職実践演習の課題の一つとして、以下の3項目を学修目標として設定し活動に取り組んだ。

(1)行事に応じたねらい・内容について集団で討議をすることができる。

(2)実施の流れについて、保育者として配慮事項を検討し、計画を立案することができる。

(3)各々の役割を意識し、他者との協力体制を取ることができる。

(1)については、5歳児の7月という発達や時期を踏まえた上で、活動のねらいや内容をメンバーで討議しながら詳細に考えることを課題とした。(2)については、短大で実施するプログラムはすべて学生主導で実施するため、計画したプログラムを実施するための保育

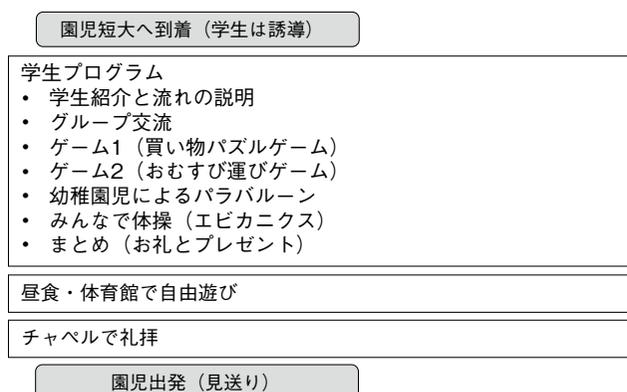


図 1. 年長児サマースクールの内容

者としての配慮事項を検討すること、(3)については、計画した内容を17名の学生で役割分担し、連携を取りながら実践することを課題とした。また、サマースクール当日に向けての計画、準備を進めるに際して、学生は6月に授業の空き時間を利用して事前にT幼稚園を訪問し、園児と直接触れ合う機会を通して、年長児の年齢や集団の特徴を理解するよう努め、具体的な計画作成、準備に臨んだ。学生が計画した主なプログラムは図1の通りである。学生プログラムについては、基本的に学生主導で実施し、引率教員はプログラム中においては補助的な役割をすることとした。

2.3 振り返りレポートの記入方法

振り返りレポートの記入は、サマースクール実施後当日のうちに行った。振り返りレポートは「企画・準備」「実践当日」「全体の反省」のそれぞれについて記入し、特に文字数制限は行わなかった。「企画・準備」は、サマースクール実施に向けた企画・準備についての振り返り、「実践当日」は、サマースクール当日の実践についての振り返り、「全体の反省」は、サマースクールへの取り組み全体を通しての感想として、それぞれの項目において学んだことや反省点、課題など感じたことを自由に記述することとした。

2.4 振り返りの自由記述の分析方法

振り返りレポートに書かれた「企画・準備」「実践当日」「全体の反省」の自由記述について、それら項目ごとにテキストマイニング分析を行った。テキストマイニング分析とは、計量的分析方法を用いて、テキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法である(樋口, 2014)。分析には計量テキスト分析を行うために開発されたフリーソフトウェアであるKH Coder(ver.2.00)を用いた。分析手順は、各学生が振り返りシートに書いた記述を表計算ソフトExcelに入力し電子化を行った上で、「企画・準備」「実践当日」「全体の反省」の各テキストデータについて、形態素解析、頻出語の抽出、共起ネットワークを作成し、分析を行った。

3. 結果と考察

3.1 振り返りの記述の分析結果

「企画・準備」「実践当日」「全体の反省」の各項目別に頻出語を抽出した。また抽出語を用いて、出現パターンの似通ったもの、すなわち共起関係を線で表したネットワーク図

を作成した。図においては、付置された位置よりも線で結ばれているかどうかということに意味をもち、円の大きさが出現回数を、線の太さは共起関係の強さを反映させている。以下に各項目の記述における分析結果を示す。

① 「企画・準備」の記述における頻出語と共起ネットワーク

「企画・準備」の記述について、出現回数4回以上の頻出語47語（表1）、および頻出語を用いた共起ネットワーク図（図2）を作成した。抽出語で最も多いのは「思う」35回で反省など思ったことを述べる語であるため他の語と比べ多くなっている。次いで「ゲーム」23回・「準備」23回・「ゼミ」21回・「リハーサル」15回・「企画」15回、「考える」14回・「決まる」または「決める」合わせて14回・「作る」10回などの企画や準備に関わることを表す語が多く見られる。「ゼミ」とは、このサマースクールの取り組みの過程では、プログラムの中でメインとなる二つのゲームについて、二つのグループ（ゼミ）でそれぞれ一つずつゲームを分担し、その具体的な計画や準備・作業を進めたため、この語が多く出てきたと思われる。また、抽出語では、「意見」9回・「話し合う」6回・「出し合う」4回など企画・準備段階で話し合うことについての語も多く見られた。共起ネットワークからは、「ゼミごとの企画・準備やゼミ間の連携」、「ゲームの企画・準備」、「学生同士の話し合い」、「役割分担」といったまとまりが見られた。これらの結果から、企画・準備段階における話し合いや作業、役割分担、グループ間の連携等について振り返っていたこと、具体的な学びとして、計画性や準備、そこでの連携の大切さへの気付き、また、皆で意見を出し合い、役割遂行・協力し合うことの楽しさや大切さへの気付きがあったことがうかがえた。

表1 「企画・準備」の記述における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	35	野崎ゼミ	10	施設	6	パズル	4
ゲーム	23	意見	9	実際	6	牛乳パック	4
準備	23	野田ゼミ	8	出る	6	自分	4
ゼミ	21	もう少し	7	分担	6	出し合う	4
リハーサル	15	楽しい	7	役割	6	進める	4
企画	15	決まる	7	話し合う	6	全員	4
良い	15	決める	7	サマースクール	5	早い	4
考える	14	実習	7	感じる	5	内容	4
子ども	11	人	7	作業	5	把握	4
遊び	11	多い	7	事前	5	本番	4
作る	10	確認	6	大切	5	幼稚園	4
反省	10	合同	6	大変	5		

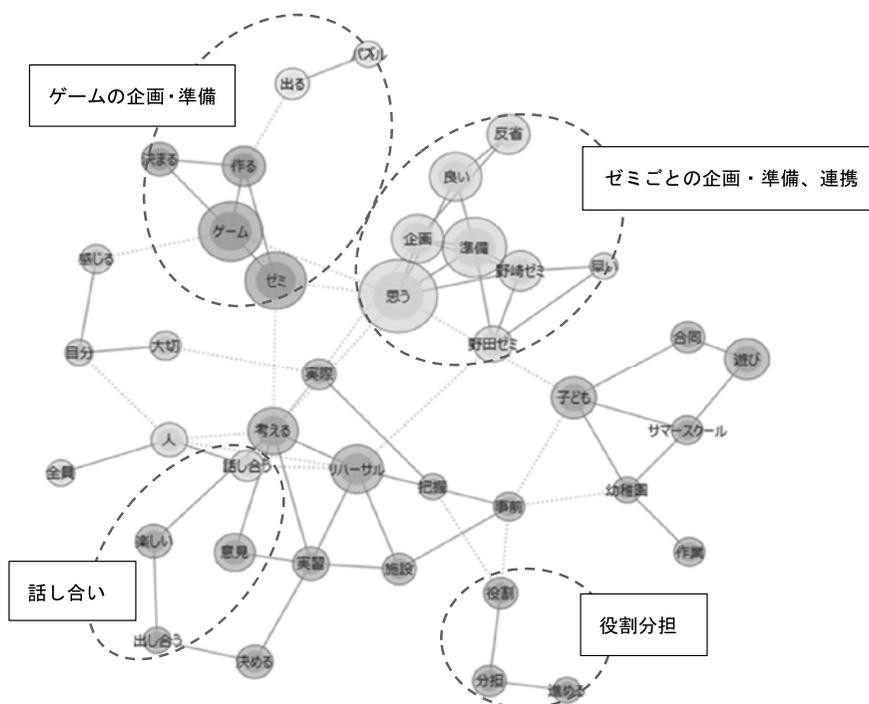


図2 「企画・準備」の記述における共起ネットワーク

② 「実践当日」の記述における頻出語と共起ネットワーク

「実践当日」の記述について、出現回数4回以上の頻出語46語(表2)、および頻出語を用いた共起ネットワーク図(図3)を作成した。抽出語の上位には、「子ども」が48回と他に大きく差をつけて多く、自分たちが計画・実施するプログラムに実際に参加している子どもたちを意識していたことがうかがわれた。次に「思う」37回が多く、「企画・準備」の記述と同様に反省など思ったことを述べるための語が見られた。続いて「ゲーム」18回・「当日」16回で、当日のプログラムのメインはゲームであり、皆でもっとも時間をかけて計画・準備した内容でもあるため、これを意識していると思われた。また、「対応」10回・「説明」8回・「確認」7回・「臨機応変」4回などプログラム実施中の子どもに対する対応、関わりについての語も多く見られた。共起ネットワークからも、「ゲームについての反省」、「子どもへの対応」(子どもへの説明、ゲームの順番を待つ子どもへの対応、トイレに行きたい子ども等個別の対応など)とその事前の確認や当日の臨機応変さ、「準備した製作物についての反省」といったまとまりが見られた。これらの結果から、実践当日については、その計画・準備にもっとも時間と労力を費やしたゲームを中心に、計画したプログラムを

実際に園児を対象に実践してみて、園児の反応や自分自身の対応のあり方はどうであったかを振り返り記述していたことがうかがわれた。また具体的な学びとして、臨機応変さの重要性への気付きや再確認、保育実践に向けた計画や配慮事項などの確認、打ち合わせの重要性への気付きがあったことがうかがわれた。

表2 「実践当日」の記述における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	48	説明	8	感じる	5	言う	4
思う	37	トイレ	7	事前	5	工夫	4
ゲーム	18	確認	7	時間	5	参加	4
当日	16	行く	7	手	5	製作	4
反省	13	待つ	7	少し	5	担当	4
子	12	サマースクール	6	場所	5	不安	4
対応	10	ゼミ	6	前	5	落ちる	4
多い	9	リハーサル	6	練習	5	良い	4
来る	9	声	6	たくさん	4	臨機応変	4
プレスレット	8	グループ	5	もう少し	4	連れる	4
考える	8	楽しい	5	コーン	4		
自分	8	楽しむ	5	決める	4		

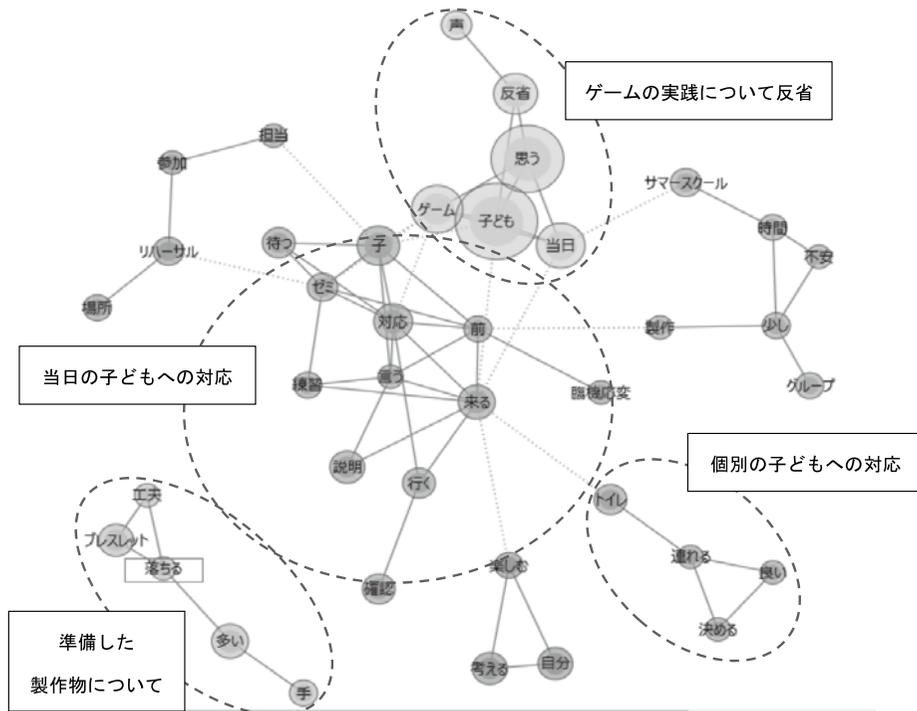


図3 「実践当日」の記述における共起ネットワーク

③ 「全体の反省」の記述における頻出語と共起ネットワーク

「全体の反省」の記述について、出現回数4回以上の頻出語39語(表3)、および頻出語を用いた共起ネットワーク図(図4)を作成した。抽出語の上位には、「実践当日」と同様、「子ども」30回が最も多く、実際の子どもに自分たちが計画したプログラムを実施したことを通して感じたことを記述していることがうかがえた。回数としては次に多い「思う」26回については、これまで述べたことと同じである。次いで「学ぶ」8回・「楽しい」8回・「時間」7回・「楽しむ」5回など、サマースクールの取り組みを通じた様々な学び、子どもの楽しむ姿が見られたことや自分も楽しい時間を過ごせたこと、それらによる充実感や達成感を得られていたことがうかがえた。「企画」「準備」「対応」7回など学びや反省の内容についての語も多く見られた。また、「就職」5回・「活かす」4回など、サマースクールの取り組みでの経験や学びを、就職や今後の保育につなげることを意識した語も見られた。共起ネットワークからも、「準備における反省」、当日の「子どもの様子に合わせた対応」や「連携」の必要性など実践における反省、「達成感や充実感」、「学びを就職に活かす意識」といったまとまりが見られた。これらの結果から、サマースクールの取り組み全体を通して、当日の実践はもとより実践後に改めて企画・準備段階での取り組みについて、さらに就職も意識しながら振り返っていることがうかがえた。自分たちで考え実践したことへの手ごたえを感じ、保育実践の経験を通して今後保育者を目指す上での自信にもつながったのではないかと思われる。

表3 「全体の反省」の記述における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	30	企画	7	リハーサル	5	改めて	4
思う	26	時間	7	過ごす	5	活かす	4
考える	11	準備	7	楽しむ	5	協力	4
行う	11	先生	7	感じる	5	今後	4
サマースクール	10	対応	7	事前	5	姿	4
保育	10	必要	7	自分	5	成功	4
たくさん	8	ゼミ	6	就職	5	声	4
学ぶ	8	見る	6	大切	5	幼稚園	4
楽しい	8	今回	6	反省	5	様子	4
全体	8	良い	6	ゲーム	4		

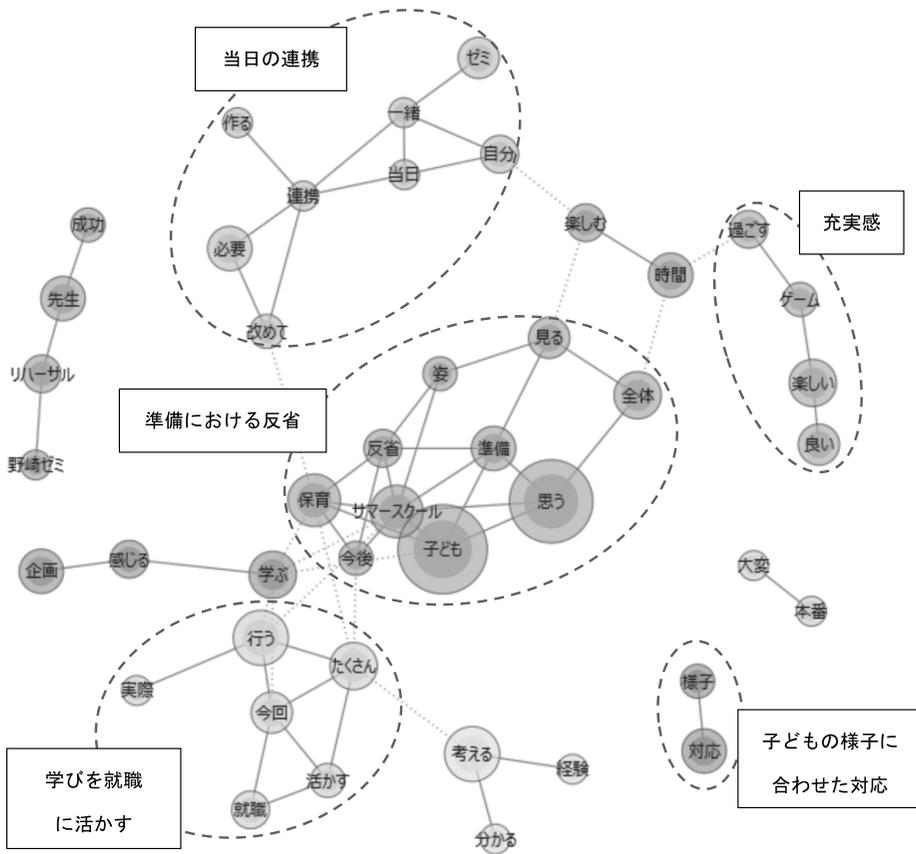


図4 「全体の反省」の記述における共起ネットワーク

以上の振り返り記述の分析結果をもとに、今回の学生の学修目標から活動の学びについて考察を試みる。まず一つ目の目標「行事に応じたねらい・内容について集団で討議をすることができる」については、記述の分析結果から、企画・準備の段階で、皆で意見を出し合うこと、話し合うことの大切さや楽しさを感じていることがうかがえた。この活動のなかで、プログラムのメインとなるゲーム等活動のねらいや内容について学生たちは討議する機会を多く得て、これについて学ぶことができていると思われる。二つ目の目標「実施の流れについて、保育者として配慮事項を検討し、計画を立案することができる」については、記述の分析結果から、当日の実施における子どもへの対応、配慮を考えておくことの重要性への気付きがあったことがうかがえた。この活動の中で、子どもへの対応や環境の構成などについて考えながら、また話し合いながら、計画を立てる経験ができ、さらにそれを実施したことで、事前に配慮事項を十分に予測、検討することの重要性、配慮す

べき内容そのものについても学ぶことができたと思われる。三つ目の目標「各々の役割を意識し、他者との協力体制を取ることができる」については、記述の分析結果から、企画・準備また実践時における役割分担や連携、協力の重要性への気付きが見られた。この活動が、一人では成し得ない行事の取り組みであるがゆえに、各々が自身の役割を全体の流れや動きの中で意識し、遂行することが求められ、この態度を学ぶ機会になったと思われる。

4. まとめ

本研究では、「教職実践演習」の実践課題の一つとして実施した「年長児サマースクール」の企画・実践について、振り返りレポートにおける自由記述をテキストマインド分析した結果をもとに、この活動における学生の学びと課題を検討した。

学生は、年長児サマースクールの企画・実践において、子どもの実態を踏まえて活動のねらいや内容について自ら考え、皆で話し合うこと、子どもへの対応や環境構成等における配慮点を考えながら計画を立てること、その計画を実際の子どもを対象に実践してみることで、臨機応変さを求められる場面に度々遭遇し、うまく対応できたあるいはできなかったどちらの実感からも、事前の細かな配慮点や役割分担等の確認、仲間同士の連携・協力の大切さに気付く等の学びが得られていることがうかがえた。また保育実践の経験自体が、自信へとつながることもうかがえた。実践後には当日の実践だけでなく、それとつなげて企画・準備段階を振り返ることができていたと思われる。

この活動において、学生は、保育に求められる計画、実践、反省・評価の経験を得ることができたといえる。しかし保育者には、振り返り後の改善までを含むPDCAサイクルを理解し展開する力が求められる。今回は振り返りの経験までで終わっているため、今後は、実践後の反省・評価を踏まえ、次の保育の計画、実践に繋げる経験ができるような学生の学修課題を考えていく必要がある。

付記

この論文は、2018・2019年度名古屋柳城短期大学奨励研究費による研究成果の一部として、第3回日本保育者養成教育学会（東北福祉大学）にて2019年3月2日にポスター発表された原稿に加筆をした。

参考文献

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』2014年，ナカニシヤ出版
文部科学省『幼稚園教育要領＜平成29年告示＞』2017年，フレーベル館
厚生労働省『保育所保育指針＜平成29年告示＞』2017年，フレーベル館

Planning and Practice the Summer School for Final Year of Kindergarten (2): Analysis of Presentation Report

Nozaki, Makoto* Noda, Satomi*

本研究では、「教職実践演習」の実践課題の一つとして実施した「幼稚園年長児サマースクール」の企画・実践について、学生の振り返りレポートの記述をテキストマイニング分析した結果から、この取り組みを通しての学生の学びと課題を検討した。振り返りレポートの「企画・準備」「実践当日」「全体の反省」それぞれの項目の自由記述について分析した結果、学生の学びとして、振り返りの記述における頻出語および共起ネットワークの結果から、「企画・準備」では、企画・準備段階における話し合いや作業、役割分担、連携等について振り返っていたことがうかがえた。「実践当日」については、その計画・準備にもっとも時間と労力を費やしたゲームを中心に、計画したプログラムを実際に園児を対象に実践してみて、園児の反応や自分自身の対応のあり方はどうであったかを振り返っていたことがうかがえた。「全体の反省」では、当日の実践はもとより改めて企画・準備段階での取り組みについて、さらに就職も意識しながら振り返っていたことがうかがえた。

キーワード：幼稚園年長児, 教職実践演習, 振り返り, テキストマイニング分析

